

トップページ：<http://mylibrary.maeda1.jp/>

ブログ「石油と中東」（日本語）：https://blog.goo.ne.jp/maedatakayuki_1943

マイライブラリーNo. : 0 5 7 6

(注)本稿は2023年5月11日から17日まで3回に分けて「ブログ・石油と中東」に掲載したレポートをまとめたものです。

2023. 5. 18

前田 高行

(写真は語る)激変する中東外交とその顔

中東の外交が激しく変化している。サウジアラビアとイランの和解、シリアのアラブ連盟復帰、エジプトとトルコの雪解け、イランの近隣諸国への接近等々、その例は枚挙にいとまがない。背景にあるのは米国の中東離れ、或いはロシアとウクライナの戦争など中東をめぐる国際政治の動きであり、欧米先進国に対抗するグローバル・サウスの動きであろう。そこに石油・天然ガスのエネルギー問題が絡む。

最近の外交の特色は各国首脳が相手国を訪問したり、サミットで直接言葉を交わすことであろう。それはもちろん新型コロナウイルスが終息しつつあるためである。

以下の写真は今年1－5月にかけて各国のトップあるいは外務大臣が外国を訪問した際の報道写真である。これによって激しく変化する中東外交の姿が見えるであろう。



1月4日、UAEのアブダラー外相がシリアを訪問、アサド大統領と会談した。シリアはアラブ連盟から除名され、米国から経済制裁を受けるなど国際社会から孤立していたが、国内ではロシアとイランの後押しでIS(イスラム国)をほぼ壊滅し、また米国やサウジアラビアの支援を受ける反政府勢力を実力で抑え込みほぼ全土を掌握した。シリアは国際的な地

位の回復を目指して昨年から動き始めている。

かたや UAE はイスラエルと国交を回復、外交に自信を持った同国は GCC の先陣を切ってシリアとの関係改善に乗り出している。同国は西側(イスラエルー米国)あるいは東側(シリアーロシア)のいずれか一方に与することなく、また GCC の盟主を自認するサウジアラビアとも一定の距離を保ち、地域の外交問題に積極的に関与し、ひいてはグローバル・サウス陣営の中東における先導者を目指しているように見える。



10日後の1月14日、イラン外相がシリアを訪問、アサド大統領と会談した。両国は共に西側の経済制裁を受けて苦境にある。イランは米国の核協議離脱により政治面でも孤立し、また宗教面では宗派(シーア派対スンニ派)でアラブ諸国と対立、さらには女性のスカーフ着用問題で欧米諸国の反感を買っている。

しかしイランが世界から孤立しているかと言えば決してそのようなことはない。イラン首脳はアラブ諸国を積極的に訪問し彼らの反イスラエル(反ネタニヤフ)感情を掻き立て外交の成果をあげている。



自他共にアラブ及びアフリカの盟主であるエジプトは1月31日、外相がロシアを訪問した。ウクライナとの戦争でロシアがNATOを含む日欧米先進国から制裁を受け苦境にある。しかし国際的に孤立無援という訳でもない。国連制裁決議には中国、インド、エジプト、アフリカ諸国などいわゆるグローバル・サウス各国は賛成票を投じていない。

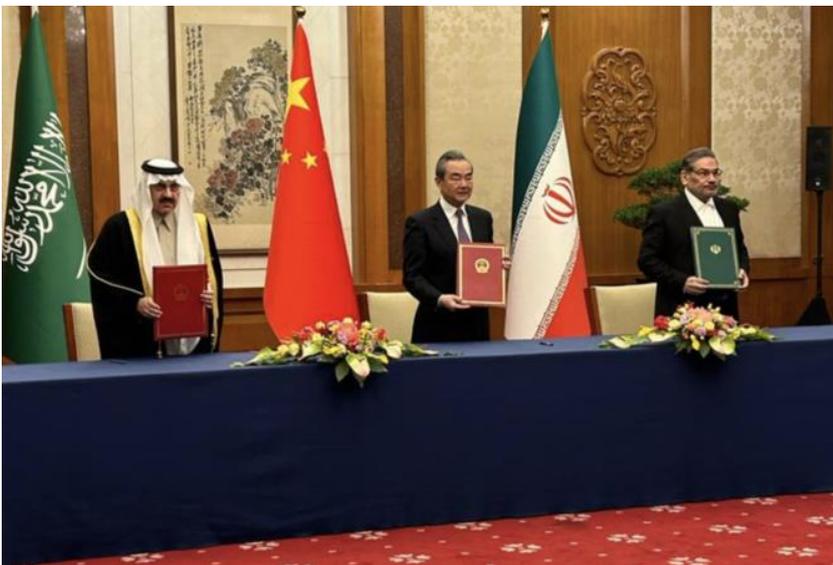
そしてロシアはエネルギー大国であり、また食糧・肥料の輸出大国である。ロシアは自国が開発途上国の死活を握っていることを承知している。

一方、エジプトはロシアに石油及び食料の安全保障を期待している。と同時に、エジプトは戦争で余裕のないロシアに代わってシリア、リビア、スーダン各国の問題を解決し、アラブ諸国に対して引き続き盟主であり続けようとしている。盟主の地位を狙うトルコやサウジアラビアの台頭を許すわけにはいかないのである。



じわじわと地域に乗り出すシリアに負けじとばかり、西欧諸国の制裁に苦しむイランもライシ大統領が2月14日、中国を訪問した。日米欧によるイラン原油輸入禁止措置が浸透すると、中国はイランの足元を見て安く買い叩き最大の買い手となった。ともあれイランにとってはありがたい顧客である。米国が中東から手を引き、ヨーロッパ及びロシアがウク

ライナ問題で泥沼に落ちた隙に、中国は労せずして中東の核心部に入り込んだ訳である。



その中国は3月10日、イランとサウジアラビアの仲を取り持つと言う誰しも予想しなかった挙に出て世界を驚かせた。仇敵の間柄のイランとサウジアラビアの和解は雪解けが進む中東の中で取り残された最大の課題であった。両国とも関係改善のきっかけを求めていたが、サウド家が支配する絶対君主制国家のサウジアラビアと、イスラム教シーア派を大義とする宗政一致国家のイラン

とでは余りに違いすぎる大国同士である。そのため周辺国で仲介役を担える国がなかった。

そこに突然躍り出てきたのが中国である。折しも中国国内では全国人民代表大会で第3

期習近平政権が発足したばかりである。習政権はイラン・サウジ仲介と言う大きな獲物を獲得したのであった。

中東外交は 2 国間外交だけではない。関係する国々が一堂に会する活発な多国間外交が行われ、或いは国際的な連盟組織も問題解決に一役を買った。



4 月 14 日にはサウジアラビアのジェッダに GCC6 カ国のほか、エジプト、イラク、シリア及びヨルダン 9 カ国の外相が集まった。主要議題はシリアのアラブ連盟復帰とイエメン内戦終結である。シリアの連盟復帰についてはすでにサウジアラビア、エジプト、イラクなど主要なアラブ国家はこれまでの個別会談で同意している。

今回の会合は言わば翌月リヤドで開催されるアラブ連盟首脳会議（サミット）の露払いである。しかし参加国の中で唯一シリアの連盟復帰に難色を示した国があった。GCC 構成国の一つカタールである。かつての GCC はサウジアラビアが有無を言わず他の 5 カ国を従わせてきた。しかしサウジアラビアの指導力も最近めっきり落ちてきたのである。



5 月 7 日、カイロでアラブ連盟外相会議が開催され、シリアの連盟復帰が賛成多数で採択された。こうしてシリアは十数年ぶりにアラブ連盟に復帰することとなった。

2011 年の『アラブの春』でシリアのアサド大統領は国内民主派を徹底的に弾圧したため、アラブ連盟を除名された。同時に過激派『イスラム国 (IS)』が台頭し、シリア国内は四分五裂、アサド大統領の運命は風前の灯火となった。

しかし世界はイスラム過激派 IS にアサド以上の脅威を抱いた。その結果、シリア国内

民主勢力を後押しする西欧諸国と、ロシアとイランが後押しするアサド政権は一方で対立しつつ、他方では共同して IS 掃討に当たる奇妙な構図となった。そして IS 勢力が駆逐される頃にはアサド政権は民主勢力を圧倒して国内を掌握したのである。こうして西側が嫌う強権政府がまた一つアラブ連盟に復帰した訳である。

もちろん連盟加盟国すべてがシリアの復帰を歓迎した訳ではない。先に書いた通りカタールはこの会議を欠席した。会議で全会一致で採択されたのはイスラエルのパレスチナ弾圧に対する非難決議である。アラブのイスラエル批判は毎度のことであり、彼らは最近の国際会議で使われる常套句『最も強い言葉』でイスラエルを非難した。但しいずれの国も自ら行動を起こす気は毛頭ない。イスラエルを本気で怒らせれば、自分に跳ね返ってくるのが解っているからだ。アラブのイスラエル非難は常に言葉だけある。



5月10日、ロシア外相はモスクワにイラン、イラク及びトルコ外相を招き、トルコとシリアの関係改善を協議した。トルコはクルド勢力をテロ組織と決めつけている。トルコクルド人の一部武装勢力は反政府テロ活動に走り、政府軍が反撃すると隣国シリアに逃げ込んでいる。このためトルコはシリアに越境、国境地帯を事実上占拠している。一方でトルコ国内には内戦を逃

れた多数のシリア難民キャンプがありトルコ政府の頭痛の種になっている。トルコ軍の撤退とシリア難民の帰国促進は両国の緊急課題である。

ロシアとイランはアサド政権を支えている。ロシアはシリアの地中海沿岸に軍港を借り受け、イランはイスラエルをかく乱するためシリア国内のシーア派軍事組織ヒズボラーに軍事訓練を行い、武器弾薬を補給している。4カ国はシリア内戦終結に大きな利害関係を持っている。上記写真の4カ国外相はそれぞれの国旗を背に同床異夢である。

(完)

本稿に関するコメント、ご意見をお聞かせください。

前田 高行 〒183-0027 東京都府中市本町 2-31-13-601

E-mail; maeda1@jcom.home.ne.jp